

## 研究会に参加して

筑波大学大学院博士課程 松岡 尚敏

〃 木村 勝彦

近年、「社会科離れ」がマスコミ等で叫ばれており、とくに共通一次実施以降、「世界史離れ」が顕著にみられる様になった。そこで本学会では、第7回、第8回と2回の例会にわたり、「世界史教育をどう考えるか」をテーマに研究発表会を行い、世界史教育の現状に分析を加えようと試みたのである。発表者は二谷貞夫・長瀬守・吉田寅の3氏であり、各々アンケートの調査分析や実践例の紹介等を通して様々な研究発表がなされた。以下3氏の発表内容及びその時の討論内容を略述し、若干コメントを付したい。

第7回例会では二谷氏から「世界史教育の現状と課題」という表題のもとアンケート調査による発表がなされた。まず氏はアンケート調査の分析から、「世界史離れ」がとくに共通一次実施以降におきているのではないこと、又、各学校も学習方法に工夫を凝らす等、それなりに努力が行われているということが強調された。そして氏によれば、「世界史離れ」は単に共通一次という皮相的な要因によるものではなく、むしろ世界史教育そのものに対する明確な認識が欠けているからであり、その結果、生徒の中に於いても世界史が生活と乖離したものになってしまっているというのである。この様な状況に対する打開策として、2つの提案がなされた。第1には現在の認識枠組——西欧中心的史観——を突き崩すことであり、第2には前者と関連して、全てを対等に見る目を養う主体的世界史像を形成することである。又、この提案の具体的事例としてインド洋世界史の試案が提出された。

以上の氏の提案に対し、討論ではまず、「世界史離れ」について質疑が行われ、ここでは氏の指摘された様に、世界史教育に対する認識の問題にまで及ぶべきであるという理解が得られた。又、それと関連して現場の先生方から氏の提案に対し賛同しつつも、現状の既成的認識を打破することの困難さの指摘が数多く出された。

二谷氏の提案を受け、第8回の例会では、長瀬守氏による「世界史教育をどう考えるか——その活性化への視点」及び吉田寅氏による「世界史指導法の一試案」の発表が行われた。まず長瀬氏により、「世界史離れ」に対する疑問がだされ、教科書採択率の調査等により、むしろ現実には「世界史離れ」が行われており、それは主として学校のカリキュラム及び教師側に問題があるのではないかということが指摘された。そして世界史教育の活性化について2つの提案がなされ

た。第1に授業への生活文化史の導入及び地域史学習の強調である。これは授業において、内容的には日常性をもった生活文化史を、領域的には国家史の枠組をはずす大きなareaをもつ地域史を導入することにより、学習への興味と意欲をかきたて、ひいては国際理解へと結びつけようとするものである。第2はカリキュラム編成に関してである。氏によれば「世界史離れ」を防ぐために、必修として最底2単位を設定し、その後、選択を置くべきであるということであった。

この様な長瀬氏の発表に対し、まず提示された統計について若干の質疑が行われた後、氏が地域史学習に際して主張された倒置的学習法を使用した場合、中世の位置付けは如何という質問があった。これに対し、中世は近現代の序幕として位置づけられるという返答があった。又2単位必修の問題については中学校の地理・歴史との関連性について討議が行われた。そして、最後に氏の主張の中で最も重要であろうと思える生活文化史の導入について討論が行われた。この討論の結果、凡そ次の様な共通理解に達した。現在は授業内容が政治史中心から次第に社会経済史中心になってきているが、未だ授業に生活文化史が殆ど導入されていない。そこで、「世界史離れ」が生活文化史の学習で防止できるのかということについては、実践的裏付けが必要であろうということである。

次に吉田寅氏による発表が行われた。氏は以前、自ら実践された世界史のグループ学習及び文学作品による課題学習について紹介発表された。グループ学習は6～8名でグループをつくり世界史上の人物について討論し、最後にクラス全体会で発表しあうという方法であり、文学作品による課題学習とは世界史に関する文学作品を選択・読書させレポートを提出させる方法である。又、これらはともに能動的学習を目指したものであり、長所としては主体的に多方面から学べるということがあげられた。ただグループ学習は共通一次実施以降、実施しにくくなったということとも付け加えられた。

以上の氏の発表をもとに討論に入り、まず生徒間のレベルの差に関してこの方法が有効であるかどうかという質問があったが、これに対し氏から事前指導の充実等によって可能であるという返答があった。次にグループ学習及び文学作品による課題学習の年間計画に於ける位置づけについて質問があったが、前者についてはヨーロッパ史が終了した後、又後者については2年生を終えた春休みがよいであろうとの返答を得た。更に文学作品の利用について、その作品の地域的偏り、又、歴史に於ける真実性に対して若干の疑問が出された。ただ討論全体の方向としては氏の実践を肯定的に評価されるべきものとして捉えられていたようである。これは多分に氏がこの方法で実践し、更にその結果、成功を収めたという実績に裏うちされているからであろう。最後に討論の総括的な意味で、朝倉氏より、副読本の使用なども提案され、研究会は終了した。

以上が、「世界史教育をどう考えるか」をテーマに行われた2回の研究発表会における、発表

内容及びその時の討論内容の概要であるが、そこでは、次の2点が焦点になっていたように思われる。その第1点は、世界史教育の内容をいかに魅力的なものにしていくかといった点であり、第2点は、世界史教育の学習指導上でいかに工夫をしていくか、といった点である。この第1点と第2点とは、生徒の興味・関心をいかに引き出して、主体的な学習活動を展開していくかという点で、互いに密接に関連しあうものである。そして、こうした観点の背景には、現在の世界史教育が、学ぶ側にとって魅力的なものになっていないという認識が存在しているのではないだろうか。

まず、第1点の世界史教育の内容をいかに魅力的なものにしていくかといった点については、各氏とも、世界の諸地域の人々の生活や文化の歴史を取り上げることの必要性を主張されている。たとえば、二谷氏はそのことを、自分たちの生き方や展望にかかわっていく「知」をおしひろげていくとか、「知識の世界」と「生活の世界」の乖離といった状況をひっくりかえす、という言葉で表現されており、長瀬氏は、衣食住の世界を中心とした生活文化史の導入や、国家の枠ぐみを超えた生活空間・文化空間としての地域史の導入を提唱されている。こうした主張は、従来の世界史教育がともすれば王朝交替史的な、政治の流れのみを追う、単なる知識中心の学習に陥りがちであったことへの反省の上に立つものであろう。また、このような生活や文化の歴史を取り上げる観点は、学習指導要領「世界史」の文化圏学習の留意点においても「各文化圏の風土や民族に触れ、人々の生活の様子が具体的に理解できるようにし、政治の流れのみを追う学習にならないように留意する」と述べられており、また、日本史教育においても強調されている観点である。

次に、第2点の世界史教育の学習指導上でいかに工夫していくか、という点については、吉田氏の実践、すなわちグループ討議を導入した授業の展開や、生徒に世界史に関わる文学作品を讀書させレポートを提出させるといった課題学習の実践は、ひとつの示唆を与えるものである。また、二谷氏は視聴覚教材等の活用についてアンケート調査を実施した結果、テレビをはじめ絵画・写真・絵はがき・ポスター・音楽作品から、切手・紙幣・コイン・絵本・児童文学・詩・小説・展覧会の目録に至るまで、実に多くの視聴覚教材が活用され、学習指導上さまざまな工夫がみられたことを報告している。さらに、長瀬氏はテーマ学習の新しい視点として、従来の教時間にわたるような大きなテーマの他に、20～30分単位でこなせる中・小テーマを設定して、授業の中に組み込んでいくことを提唱されている。これらの提案は、生徒の世界史に対する興味と関心を高め、ひいては、生徒自らが考え正しい判断を下せる能力を育成すること、すなわち歴史的思考力を培うことをめざしたものといえよう。

今後、世界史教育に対して、上記のような観点からより一層の検討を加えることによってはい

めて、生徒にとって身近で親しみやすい世界史学習を創り出していくことが可能となり、またその世界史学習が、将来国際社会の中で生きていくであろう生徒たちの生き方や世界史像の形成に大きな影響を与えることを可能にするといえる。日本は、今後より一層国際社会の中で重要な位置を占めるようになるであろうし、われわれが世界各地の人々と接触する機会も多くなるであろう。そうした中で、国際人としていかに行動し、いかなる世界を築いていくべきかが問われることになる。そのためにも、世界の歴史についての理解とともに、国際社会に生きる日本人としての資質を養うことを目標とする世界史教育は、不可欠であり、決しておろそかにしてはならないものだと考える。こうした意味からも、今回の研究発表会で、貴重な報告がなされ、それに対して活発な討論が展開されたことは、意義深いものといえよう。